

論文と恋文

秋山公男

毎年四回生の卒論演習を担当している。そして立場上学生に、卓れた論文とは明確な問題意識を持ち、論理的な思考と客観的にして堅実な論証とを備えたものでなければならぬなどと、到底自分にも出来ないことを厚かましくも説いている。自分に出来ないまでも、それが理想とするところだと思えばまだ気が楽なのだが、近年それも少々怪しくなってきた。昨今は、不埒にも、論文も恋文も似たものなどと思えたりする。かりに百篇の論文を読むと、読んこれまでの経験からすると、読んで感銘を覚えるようなものは、そのうち精々四・五篇にとどまる。のみならず、その感銘の由縁とはいえば、多くの場合客観的な分析

や論理的な考証などにはない。むしろ作品の急所の押え方、読みのセンス、評価の角度など、論者の観点が当方のそれとピッタリと符合し琴線に触れたと思える時に感銘を覚えるようである。つまり、同好の士、同趣味の人を発見した折の感激に似ている。以前はいわゆる合理的な論の形成を目標に、万人を説伏する気であったように思う。現在はそんな野心はない。百人の人が読んでくれたとして、その内一人でも二人でも「同好の士」があってくればそれで本望である。未知・未見の「同好の士」を念頭に、想いのたけを陳べる論文は、どこか恋文を綴る行為の無償性に通うものがあるように思える。

例年二月の末に卒論の試問がある。それに備えて、一・二月は相当数の卒論を読まねばならない。しかしそれは、苦痛ばかりではない。学生の論文であれ、「同好の士」を発見し、我が意を得た折の感激は同じである。むしろよそよそしい活字ではなく、その筆跡から直接筆者の息吹が感じられるだけに、感銘もひとしおである。それが男子学生のものであれば、祝杯の一つも挙げたくなる。女子学生であればフトドキにも、アイジンにしてもいいなどと思ったりする。それにしても、近年学者・研究者と称される人々の手になる著述に感激すること益々乏しくなってきた。逆に、学生の論文に多く「同好の士」を発見する。手なれた研究者のそれより、学生の論述の方により瑞々しい感性と、たわめられずに捉えられた作品(文学)の生命が感受されるからであろう。そこには、本物の恋文が発する熱がある。賀すべきことだと思っている。

第三十二回大会

日時 昭和六十三年六月十二日(日)

自午前十時 至午後五時半

場所 立命館大学末川記念会館

一 研究発表

(午前)

司会II中村 史・瀧本和成

中臣宅守と狭野茅上娘子の贈答歌

について

「鹿の子餅」試論―「舜」の特質

富田成美

安部公房「砂の女」論

(午後)

司会II安森敏隆・磯村清隆

芥川龍之介の初期小説

―小説表現の自立とイロニー―

友田悦生

「御裳濯河歌合・宮河歌合・兼好

歌集」の写本について

長意吉麻呂応詔歌の讃歌性

真下 厚

二 講演

内侍所神楽と神楽歌の成立

松前 健

三 総会

会長秋山公男教授の挨拶の後、議事に入った。昭和六十二年度の活動報告、会計決算報告(別項I)および監査報告があり、承認された。次いで六十三年度の活動予定(「論究日本文学」52号の刊行など)と予算案(別項II)の説明があり、審議ののち原案どおり承認された。また、役員の変更も行なわれた。参加者は約六十名余。大会終了後、近くで懇親会をもった。

I 会計決算報告(昭和62・63・64・65)

収入の部	
繰越金	一、一八六、〇二〇円
会費	三二一、〇〇〇円
補助金	二五〇、〇〇〇円
雑収入	二二一、二〇〇円
計	一、九六八、二二〇円
支出の部	
事業費	五〇〇、〇〇〇円
通信費	一〇三、八七〇円
事務費	二一、五〇五円
雑支出	一五〇、八一〇円
次年度繰越	一、一九二、〇三〇円

II 昭和六十三年年度予算

収入の部	
予備費	一、一九二、〇三〇円
計	(昭63・64・65)
繰越金	(前年度繰越金)
会費	三二〇、〇〇〇円
補助金	二九〇、〇〇〇円
雑収入	二〇、〇〇〇円
計	一、八二二、〇三〇円
支出の部	
事業費	四五〇、〇〇〇円
通信費	一二〇、〇〇〇円
事務費	五〇、〇〇〇円
雑支出	二〇、〇〇〇円
予備費	一、一八二、〇三〇円
計	(繰越金)
	一、八二二、〇三〇円
III 昭和六十三年度役員	
会長	秋山公男
評議員	秋山公男 浅田 隆 芦谷信和
	安藤勝志 磯村清隆 上田 博 遠藤庄
	治 大石征勝 大橋清秀 岡本彦一 尾